

(別添)

令和3年度「ちばっ子の学び変革推進事業」(検証協力校)研究状況報告書

1 学校紹介

本校は東金市の中心にあり、商店街、官庁街と農村地帯から成り立っている。学区の人々は教育に対して協力的である。

児童は、明るく素直で学習にも運動にも意欲的に取り組んでいる。「夢と志を抱く たくましい文化人の育成」という学校目標を掲げ、一人一人のよさを伸ばす指導を心がけている。

2 研究主題

「自ら考え、表現する児童の育成～目的に応じ、表現を工夫して書くことを通して～」

・研究教科 国語科

・研究仮説

①書く目的がとらえられるように導入を工夫し、魅力的な学習課題が設定できれば、自ら考え主体的に学ぶ児童が育つであろう。

②目的に合った表現の仕方について話し合う場を設定すれば、互いに表現を磨きあい表現力の向上が図れるであろう。

3 研究の概要

(1) 児童生徒の実態と課題

昨年度の研究は、「自ら考え、学び合う児童の育成」というテーマで取り組んできた。「読むこと」「書くこと」の学習は役に立つ、という意識の高まりはあったものの、自分の考えを形成することや目的に応じて表現することなどに課題があった。

○全国学力・学習状況調査の分析結果から

令和2年度の分析結果から、「書くこと」の領域に課題があることが分かった。特に「事実と意見を区別して書くこと」や「複数の情報を関係付け、自分の考えをまとめること」に課題があった。

令和3年度の分析結果から、「読むこと」の領域にも課題があることが分かった。解答率の低い設問から、「必要な情報を読み取ること」と「与えられた条件を満たして記述すること」が特に難しいと考えられる。文章を読み取れず意味を理解できていないので、書けないということが明らかで、「読んで考えて、書く」ことに課題がある。

○令和3年6月の児童の意識調査から

「新しい学習が始まる時には、『書いてみよう』という気持ちになっていますか」という設問に対し、87.1%以上の児童が、肯定的な回答をしている。書くことに対して意欲的であることが分かる。

「書いたものを友達と読んで、気付いたことを話し合っていますか」という設問では、コロナ禍の影響を受け、交流学习を設定することが十分にできなかったことから、主に低学年で肯定的な回答が低くなっている。

(2) 学力向上のための取組

県の施策である「思考し、表現する力」を高める実践モデルプログラムを活用し授業改善を行った。

○活動の実際

【重点を置いた取組】

- 「見出す」の場面で、書く目的をとらえる導入の工夫や魅力的な学習課題の設定をする。
- 「広げ深める」の場面で、目的に合った表現になっているか視点を明確にして話し合う場を設定する。

【見出す・・・書く目的をとらえる導入の工夫と魅力的な学習課題の設定】



〔まちたんけんで題材を見つける児童〕

手立て① 他教科との関連を図る

第2学年『2年3組 まちたんけんで見つけたよ！ブック』をつくらう』では、単元の導入で生活科の「まちたんけん」で見つけたことを題材にして、見つけたことを友達に報告するという学習のめあてを持たせた。「知らせたい」という意欲を持つことで、書くことに主体的に取り組むことができた。



〔提案するテーマを話し合う児童〕

手立て② 目的意識・相手意識を持たせる

第6学年「提案します！鵜嶺小改善プロジェクト」では、最高学年として、「学校をより良くするために、委員会活動で提案する」という目的意識を持たせることで、伝えることが明確になり、具体性のある提案文を書くことができた。



〔できあがったパンフレットを手渡す児童〕

手立て③ 実生活で役に立つ課題を設定する

第4学年『4年3組防災ブック』をつくらう』では、「自然災害に備える方法を調べたり、考えたりしたことを意見文に書く」という学習課題を設定した。地域や家族のことを考えて、どの情報を理由や事例として挙げるのが有効かを話し合いながら、実際に役に立つパンフレットを作成することができた。

【広げ深める・・・目的に合った表現になっているか視点を明確にして話し合う場の設定】



〔話し合いの後、自分で順番を決める児童〕

手立て④ 構成について話し合う場を設定する

～「どのような順にしたらよいか」～

第3学年「食べ物のひみつブックをつくらう』では、クイズ形式で「すがたが分かりやすい順」「みんながよく食べる順」「みんなが興味をもつ順」などに気付かせながら、構成について話し合う場を設定した。児童は、読み手を意識しながら伝え方による効果を考えて、書く順番を決定することができた。

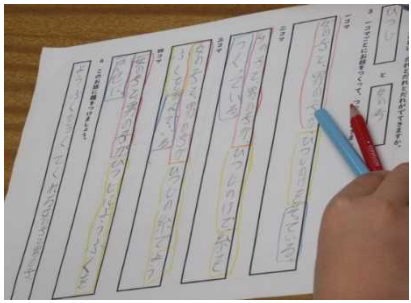


〔観点にそって表現を確認する児童〕

手立て⑤ 語彙を増やす話し合いの場を設定する

～「どんな言葉を選んだらよいか」～

第1学年「なかよしカレンダーをつくろう」では、「おわり」に感想を書くために、どんな観点で書いたらよいかを話し合う場を設定した。「やる気」「ほめほめ」「わくわく」の3つの観点に気付かせることで語彙を増やし、表現の幅を広げることができた。



〔言葉のつなぎ方を確かめる児童〕

手立て⑥ 正しい文章になっているか話し合う場を設定する

～「主語・述語・修飾語を正しくつなげるには、どうしたらよいか」～

特別支援学級「君は、わかるかな？正しく書いて伝えよう！！」では、すごろくゲームで語彙を増やしながらか、絵や4コマまんがを使って文を作る場を設定した。主語・述語・修飾語を正しくつなげる助詞の使い方を話し合うことで表現力を向上させることができた。



〔付箋を使って推敲する児童〕

手立て⑦ 表現を磨き合う推敲の場を設定する

～「説得力のある意見文にするには、どうしたらよいか」～

第5学年「発信しよう！鵜嶺小SDGs」では、「目的に合った資料を選んでいるか」「資料と文章を対応させているか」「資料から分かることと、自分が考えたことを分けて書いているか」という3つの観点で話し合うことで、説得力のある文章になるよう推敲し、表現を磨くことができた。

令和3年度12月に全校児童に実施した調査

(1) 新しい学習が始まる時には、「書いてみよう」という気持ちになっていますか。

とても思う・だいたい思うなど肯定的な回答・・・86.1%

(2) 書いたものを友達と読んで、気付いたことを話し合っていますか。

とても思う・だいたい思うなど肯定的な回答・・・85.9%

(1)の調査から、本校の86.1%以上の児童が、書くことに対して主体的に取り組んでいることが分かる。6月の調査と比べると数値は横ばいではあるが、全体から見ると、かなり高い割合で「書くこと」に主体的に取り組んでいる様子が分かる。また、(2)の調査では、主に低学年で大きな伸びがあった。コロナ禍ではあるが、付箋やチェックシートなどを用い、工夫しながら話し合う場を設定したことで、表現を磨き合うことができたと考えられる。

(3) 加配教員の活用

本校は、加配教員1名が国語専科として3～6年生の各学級に週1時間ずつティーム・ティーチン

グの指導に当たっている。主に書くことが苦手な児童や学習の進め方が分からない児童に寄り添って、きめ細やかな指導を行っている。国語科の学習につまずきのある児童をよく見取り、支援することで、児童は、最後まで粘り強く学習に取り組むことができている。また、図書主任として、学習に必要な図書を事前に確保したり、児童や教職員に適宜、紹介したりするなど、国語科の学習に密接に関わっている。教職員は、図書を有効に活用することで教材研究が深まり、質の高い授業が実践できるようになっている。また、児童においては、単元に合わせて本を選び、進んで読むようになってきている。特に高学年では、複数の本を比べながら読んだり、自分に必要な情報を本から集めたりすることができるようになった児童も多い。

4 成果

- ・魅力的な学習課題の設定をすることで、書く目的をしっかりと持つことができ、最後まで粘り強く書くことができた。
- ・文章構成や表現の効果などについて、視点を明確にして話し合うことで、目的に合った表現を工夫することができた。
- ・書くことに苦手意識のある児童が作品を完成させたことで、自信を持つことができた。
- ・授業の事前と事後で「書くこと」についての調査をした結果、令和3年11月現在で実践を終えたすべての学年で「書く力」が伸びていた。ねらいに合った力を付けることができたのではないかと考えられる。

5 今後の課題

- ・話し合いの進め方やグループ編成の仕方については、さらに検討する必要がある。学年の発達段階に応じた話し合い方について共通理解できるようにしたい。
- ・表現の効果を考えさせることが、書く目的に合った表現のよさに気付くことにつながる。表現のよさに気付くようなモデル文の提示ができるようにしたい。
- ・書く力の個人差は、語彙力によるところが大きい。語彙を増やす指導の仕方をさらに工夫していきたい。
- ・令和3年12月に全校児童に実施した調査結果より、「友達の発表と自分の書いたものを比べて聞き、作品をよりよくしようとしていますか」という設問で、少数ではあるが否定的な回答をする児童がいた。「よりよくなった」という実感が持てない児童については、ふりかえりの視点を明確に持たせるなどの工夫が必要である。